

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい2

## 目次

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい2

番外編 本物の神子は今を生きる

# Characters

## ◆ リア・メキゾクス ◆

メキゾクス国の王族であり神子。  
なぜかアルフレートに執着しており  
イアンのことを  
敵視しているようで……？

## ◆ ショーン・バリー ◆

子爵令息でマシューの婚約者。  
誠実すぎて不器用な、  
献身型の実直人。  
ボンコツ神の事件以降、  
マシューを見るだけで  
感動して泣くように。

## ◆ マシュー・アッテン ◆

伯爵令息でショーンの婚約者。  
普段は冷静で理知的だが、  
お茶会での様子がおかしくて——？

## ◆ アルフレート・ジェニングス ◆

第二王子でイアンの婚約者。  
無事にイアンと両想いになり、  
溺愛し尽くしている。

## ◆ イアン・ラッセル ◆

鬼畜BLゲームの悪役令息に転生し、  
婚約破棄を目論んでいたが、  
晴れて婚約者と両想いに。

悪役令息イアン・ラッセルは  
婚約破棄したい2

## プロローグ

国を離れて一か月は経つだろうか。慣れない土地での初仕事と慣れない宿屋での寝泊まりで、積み重なる疲労は、日に日に色濃くなっていた。

初めての二人での外遊は思った以上に収穫がありうまくいっているものの、意外なところから横やりが入り、溜まっていく精神的疲労は隠せない。

「アル、今日もお疲れ様」

「イアンもお疲れ様」

アルフレートとイアンは、本日の視察が一段落してホッと息を吐き出した。

瞬く間に過ぎていく時間を決して無駄にはできないため、公務中はあまり感じていないのだが、宿屋に戻るとドツと体が重くなる。

部屋の中に入った瞬間、顔に張り付けた余所行きの笑顔を消し、二人してソファに腰を下ろした。アルフレートの肩に頭をソツと乗せれば、アルフレートの手がイアンの手を握ってくれる。寄り添ったままぼんやりしている二人の疲れ具合を悟り、使用人たちが甲斐甲斐しく身の回りの世話を

してくれる中、ボソボソ囁くように語らう。

語らうとはいえ、大した話はしていない。暫くしてふと会話が途切れると、見計らっていたようにニールが声を掛けてくれた。

「イアン様、お食事はどうされますか」

「アル、お腹空いてる？」

ニールに視線を向けた後、己にピタリと張り付くアルフレートにチラリと視線を流す。アルフレートはぼんやりとしたまま、少し間を置いて小さく頭を左右に振った。

「俺はあまり」

「じゃあ、少しだけ摘めるものを貰おう」

疲労を隠せないアルフレートの頭を撫で、ニールへ返事をする<sup>しば</sup>とまた暫し口を閉じた。

ニールが頷き部屋を出ていくのを視線で追い、またアルフレートとポツリポツリと実の無い言葉を掛け合う。

「今日もアルはカッコよかったよ」

「イアンも、美しかったしカッコよかった」

「そうかあ。惚れ直した？」

「毎秒惚れてる」

そんなことを平然と言うので、胸がじんわり熱くなる。「俺も」と返し、アルフレートに惚れられる人生を選んで本当に良かったと心から思う。

そんな内容が空っぽの会話をしながら、互いの指を絡ませては外したり、軽く指を弾いて小さく笑い合ったりをして神経を落ち着かせていく。

互いに落ち着いてきた頃、ニールと他の使用人たちに促されるまま少しだけ食事を口にし、寝る準備を終えると早々にベッドに潜り込んだ。

アルフレートに抱きしめられながら、いつの間にか眠りについたらしい。

「ぐっ、う——」

暗い宿屋の一室で、苦しい荒い息と、掠れたような声が小さく響き、ハッと目を覚ます。イアンは眉を顰めながら、胸の奥がキュッと縮まるのを感じた。

「まただ……」

悪夢を見る時、アルフレートはいつもイアンを探している。抱き込んでいるイアンを決して離しはしないのに、体を震わせ、声を掠れさせ、小さく叫ぶように名を呼び続ける。切ないほど求めてくれているその声に、息が詰まるほど苦しくなった。

「……いあん、どこだっ」

「大丈夫。アル、ここにいるよ」

（アルがここまで弱ってしまっなんてな——本当に許せん）

苦しいくらいの抱擁と、迷子になったかのような泣き交じりの声に、イアンはなるだけ優しい声を掛ける。アルフレートは普段、イアンを抱きしめて離さないこと以外は心配になるほど動きも寝息も最小限のため、こうして苦しそうな呻き声を上げるのを見ると辛い。

「大丈夫、アル、俺はここにいるから」

「——うっううう」

（ここ最近ほぼ毎日だな。どうにかしてあげたいのに……）

唸るようにして歯を食い縛るのが分かり、イアンは無理矢理体を動かす。

暫く抜け出そうと格闘していると、漸くアルフレートの目が覚めて、先ほどとは打って変わって掠れた穏やかな声が聞こえてきた。

「……ん？ イアン、目が覚めた、のか？」

「うん、喉渴いたから。アルも、喉渴かない？」

「ん？ うん、そういえば、渴いた、かもしれない」

「お水持ってくるよ」

まだ頭がポヤポヤとしているらしいアルフレートの腕からスリと抜け出す。一瞬、アルフレートの手が勝手にイアンの体を追いかけるのが見えたが、まだぼんやりしているアルフレートはそれ以上動けないようだった。

シンとした宿屋の部屋の中で、テーブルにはニールが準備してくれていた水差しとカップ、そしてフルーツがあった。水差しから二つのカップに水を灌ぐと、ベッドの上で未だ気怠そうにしているアルフレートへ片方のカップを差し出す。

「アル、飲んで」

「ありがとう」

ずっと囁かれていたのだ。本人も知らぬ内に喉が渴いていたのだろう。

イアンがそっと水を一杯渡すと、アルフレートは一気に飲み干した。喉を鳴らす仕草さえ頼りなくて、胸が詰まる。

「悪い。寝苦しかったか？」

「ううん。俺は全然」

「そうか……なら良かった」

平然と返してくるが、額の汗やわずかな震えは隠せない。気づいていないのは本人だけだ。

イアン以外わりとどうでもいいアルフレートは、優先順位の下から二番目に己を置いている。一番下は他国の人間と犯罪者だ。一番はイアン、二番は側近や友人を含めた民で、三番が家族である。家族の中で唯一兄は二番目あたりだろう。とても嬉しいのだが、こういう時には少し心配になる。

「もう一杯、いる？」

「ん……トイレも行く」

「先に行つてこい」

イアンが絡むと無理をするので心配は尽きない。けれどアルフレートが悪夢を見た日は、それをおくびにも出さず、穏やかさを意識して接している。

先ほどよりハッキリとした意識はあるものの、トイレへと向かうアルフレートの足取りは、やはり少しフラついている。ユラユラと揺れながらトイレの扉へ消えていく後ろ姿を見守つて、もう一度カップに水を注いだ。

（悪夢見てる自覚ないんだよなあ）

少しするとアルフレートの足音が聞こえて、ホッと小さく息を吐き出した。そのまますぐにでも寝てしまいそうだったので、慌てて水をもう一杯飲ませてまた二人してベッドに横になる。アルフレートは何処か落ち着かない様子でイアンを抱きしめ、髪の毛の中に鼻を埋めて深呼吸をしているようだ。

「……イアンの匂い、安心する」

無意識に漏れたらしい声に、イアンは目を瞬いて小さく笑った。まるで、ここだけが安全だと言わんばかりのアルフレートに、イアンは完全に同意する。イアンもアルフレートの匂いや温もりに安心感を抱いているのだ。

イアンは慎重に耳を澄ませて、アルフレートの呼吸に乱れがないことを確認しながら体の力を抜

いた。

「イアン、まだ起きてるか」

「ああ。アルが眠るまで起きてる」

「無理しなくていい」

「してないよ。甘やかしてるんだよ」

「……じゃあ、甘える」

イアンの頭に鼻を埋めたままグリグリと顔を動かしているアルフレートに苦笑しつつ、目の前の胸板に頬をスリスリと擦り付ける。アルフレートはどうやらそうされるのが好きらしい。アルフレートの匂いが落ち着くため、当然イアンも好きなのだが。

暫く二人でグリグリし合っていると、アルフレートの腕の力が少し弱まり、また眠りに入ったのが分かった。

「やっぱり早くどうかしないと」

（寝起きのアルは可愛いけど、今は笑えない）

ここ最近毎晩、アルフレートは悪夢に魘されている。あの男が現れるようになってからずっとだ。

無頓着故に、己の神経がすり減っていることにすら気づいてないアルフレートが、可哀想で見えない。

（素面の時は元氣そうだから、倒れたりほしくないだろうけど）

慣れない土地の慣れないベッドに寝ている、という日常からかけ離れた生活をしていることも、心が休まらない原因の一つだろう。先ほどよりも随分落ち着いている穏やかな寝息に、小さく笑みを浮かべてイアンもまた瞼を閉じた。

アルフレートが魘されれば当然イアンは目が覚める。イアンとてアルフレートと同じくらい精神的な疲れを感じていた。

（ローズが早く、手紙を読んで、くれますように――）

アルフレートの頬をスリと一撫で心の中で祈りを捧げると、イアンの意識も徐々に遠くなる。ようやくと深い眠りにつけたのは、朝日が昇る時間に近かった。



## 第一章 穏やかな日々、そして旅立ち

アルフレートとイアンが外遊を言い渡され、長旅に出ることになったのは卒業目前のことだった。  
「イアン、こっちだ」

「アル、ちゃんと授業受けたか？ 昨日も俺のこと盗み見しようとして授業抜けだしただろ」

アルフレートは本日も、出会い頭にイアンに抱き着きスーハーと深呼吸を繰り返している。己の匂いを嗅がれるのに慣れてしまったイアンは、くっ付き虫をそのままに歩き出した。

「ムッ。受けた」

「むっ、じゃねえのよ。王族が変なことすんなよ」

「変じゃない。悪い虫が付かないように見張ってただけだ」

アルフレートと会話をしながら、視界の隅で同じようにハロルドに抱き着かれうっとり微笑んでいるドミニクに苦笑する。するとアルフレートがこっちを見ると言わんばかりに、両頬を両手で包んで顔の方向を変えようとしてきたので、その頭をグシャグシャ混ぜておいた。

当たり前のようにドミニクの隣に立つハロルドは、学園を卒業して一年近く経つというのに普通

に出没する。誰も疑問に思っておらず、微笑ましそうにしているのも恐怖だ。結局この後宮廷で会うのに、なぜ執務中にわざわざ迎えにくるのか甚だ疑問だが、神子との問題が片付いてからというもの、渦中にいた当て馬予定だった令息は全員漏れなく婚約者に付きまとわれているので、何かの反動なのだろう。

（今まで皆傷付いてきたから、鬱陶しいくらいでちょうどいいかもな）

騒動の渦中にいた人間は、付き合いたてのバカップルより熱愛を振りまきながら過ごしている。当て馬だった令息たちは、閨<sup>メ</sup>閨連の体力的な問題と相手の変態行為については困っているが、以前のように冷遇されるより数百倍幸せそうだ。

そうして穏やかに婚約者と愛し合うだけの数か月は瞬く間に過ぎ、卒業パーティーも終了したため、イアンたちも残すところあと数日で卒業予定となっている。

「うわ、もう時間がない……アル、行くぞ。つかそこの王太子殿下！ 聞いてます？ 行きますよ」

「私の弟の婚約者は真面目すぎていけないね」

「あ、本当ですね。ハロルド様、急ぎましょう！」

「私の婚約者は本当に勤勉で素晴らしいよ」

同じような言葉を発したイアンとドミニクに対して、全く違う反応を見せる滅茶苦茶なハロルドを一睨みし、慌てて馬車へ乗り込んだ。この後は四人で宮廷に移動し、本格的な仕事の指南を受

ける。

王太子のハロルドとその弟であるアルフレートは、陛下より少しずつ引き継ぎをされている最中だ。ハロルドは卒業してまだ一年程度、アルフレートに至ってはあと数日とはいえ、卒業前であるのに既にあくせく働いている。

陛下が元氣なので本格的に引き継ぐのはまだまだ先であるが、仕事に慣れるのに早すぎるということはない。良き人材を探すのと並行して他国に顔売ったり、貴族たちを纏めたり、国の隅から隅まで目を配り法を改訂したりと、国を良くするための仕事は多岐に亘り膨大なのだ。

（ハロルドもアルも陛下にはまだまだ勝てないって偶に言ってるし、暫くは勉強オブ勉強だな）

ドミニクとイアンは早くに王妃教育が終了したため、待っていましたと言わんばかりに結婚後の持ち回り仕事を叩きこまれていた。流石に仕事となると各自請け負うものが違うため、城に着いてしまえば別行動だ。

アルフレートとハロルドはそれに大変不満があるらしく、一つの馬車で移動すればいいものを、各自の馬車で二手に分かれて城へ向かうと決めている。その日最後の二人きりの時間なのだから密室でイチャイチャしたい、ということらしい。二人揃って王族とは思えない阿呆な動機だ。

「なんだかんだ充実してるよな」

「仕事がか？」

「仕事も恋愛も遊びも、全部な」

「俺もイアンがいるから充実している」

（アルは俺のことばっかだなあ）

アルフレートに呆れた顔をしつつも、イアンも随分浮かれている自覚はあった。軟禁された時よりどうしても触れ合いは減ったが、結婚してしまえば家も職場も一緒だ。今よりもっと二人で過ごす時間は増えるだろう、と思えば何も苦ではない。これほど恋愛脳になるのは予想外だったが、愛されているという確固たる自信があるところまで人生が煌めくのか、と感慨深い。

（こんなに毎日が煌めいてると、揺り戻しがこないか不安なくらいだ）

何気ない会話をしながらも、アルフレートが横から唇を何度も頬や頭に当ててくるのだが、これもまたいつものことである。

「イアン、顔見せて」

「見せてるだろ……んう、ちょ、落ち着いて」

アルフレートはイアンと触れ合いたい、という欲望が念頭にある。イアンがわりかしアルフレートの顔面に弱いことも悟っており、寂しいと子犬のように鳴くことを覚えてしまった。それもあつてか相変わらず邪険にできず、嫌でもないため、二人きりの時は随分甘やかしてしまっている。

チラリと覗き込んだアルフレートの顔は本当に幸せそうで、思わずふにやりと笑い返した。

「触りたい」

「こら、手！ 駄目だ、今から仕事！ 馬車ではもうしないって言っただろ？」

「……分かつてる」

「不貞腐れない！」

だがもちろん、何でも許すわけではなく締めるところは締めている。

直ぐに深くまでイチャイチャしようとするのでそれを制すと、唇を尖らせて拗ねてしまった。と  
いっても、苦笑しながらその尖った先に唇を当てると、すぐに機嫌が直ってしまうのだからかわい  
いものだ。

もしかしたらイアンからの口付けが欲しくて、わざと過剰に触れてくるのかもしれない。

「はあ……幸せだ」

「ん、そだなあ。俺も幸せ」

そして宮廷に着いてからまず第一に行われるのは、ドミニクとイアンに張り付く二人の王族を  
引き離すところからだ。嫌だ嫌だと幼子以下の駄々<sup>だだ</sup>の捏ね方をする二人を、苛々しながら護衛の  
ディップとショーンがズルズル無理矢理引つ張っていくのを見送った。

次に、いつも通り今生の別れと言わんばかりに悲壮な顔をしているドミニクに声をかけ、宮廷の  
侍従の後ろについて長い廊下を歩く。

ドミニクは王宮と宮廷内の人事や催し関連の仕事が主となるため、暫くすると二手に別れ、イア

ンは少し離れた徴税部署へ向かった。

（さつさとスベアから抜け出せて良かったわ。アルを担ぎ上げる家もなくなったし）

本来ならばスベアの婚約者であるイアンもドミニクと一緒に学ぶ予定だったが、神子関連の事件  
で派閥の溝はほぼなくなった。すると話は簡単になる。

ハロルドとドミニクの健康面に問題がないこと、二人が相思相愛で既に肉体関係にあること、妙  
な横やりを入れる家が無くなったことを理由に、アルフレートとイアンは見事にスベアではなく臣  
下としての扱いに変わったのだ。ある程度のことを学び終えた基盤があるからよしとされた、とい  
う背景もある。

王族の兄弟が多いと新たに領を賜って領主になることもあるが、アルフレートたちは二人兄弟だ。  
陛下の代は子沢山で兄弟が多く、皆が重要な領地、又は同盟国に散って立派に役目を果たしてい  
るため、アルフレートは兄を近くから支える道に進むことになった。つまり当然、イアンもハロル  
ドたちを支える一人となる。

（俺もアルも、ハロルド様たちと対立する気はないし、イイ感じに纏まって良かったわ）

「失礼します」

「どうぞ」

『王室会計院』と書かれた札のある扉を開くと、白髭を蓄えた大蔵卿<sup>おおくわんぎやう</sup>が見え頭を下げる。温和そう

な彼は長く王家に忠義を誓い、代々有能な官僚を輩出している侯爵家の出だ。肩書に似合わず物腰柔らかでとつきやすい。仕事が絡むと人が変わったようになるが、概ね部下には優しくて頼りになる長だと認識されている。

彼曰く、イアンの配属先は相当採めたらしい。

現在救国者の一人として有名であるため、広告塔のような目的で各部署がイアンを求めたようだ。大蔵卿は「身分関係なく民という民から最も恨みを買う部署といえばここ」と豪語して、見事イアンを獲得したらしい。

求められる理由が便利な象徴であることに少しだけ複雑な気持ちを抱いたが、働きやすそうな職場ではあったので特に反発はしなかった。

「これ、期限順に並べてます。一番期限が近いのは三日後です」

「助かる！」

イアンは主に書類作成に携わることになっているが、未だ学生の身であるため、一日二時間ほど指南され帰宅する。鬼気迫る様子で仕事をしている先輩方に比べるとかなり気楽なので、皆の様子を観察しながら茶を出してみたり、書類を整理するような雑用を見つけてはいそいそと働いている（この部署に関わる時間は相当少ないだろうけど、居心地がいいのはありがたい）

領地を賜るわけでもないのだから家を守るのは優秀な家令に任せ、イアンは外交担当となるアルフレートに付き添って色んな国を周ることにしたのだ。そのためこの部署へは、アルフレートに付き

添うことができない時や、考えたくもない万が一ではあるがアルフレートの身に何かがあった時の身の置き場として配属されたに過ぎない。

働かなくてもいいと言うアルフレートに「生涯アルフレートの伴侶でありたいからこそだ」と自らの気持ちを全て伝え、涙ながらに抱きしめられたのは絆が深まった良い思い出。外交が無い時には微力ながらここで仕事を手伝うので二足の草鞋を履くことになるが、イアンにとっては満足のいく道が決まった。

「ハーブティです。少し一息吐かれては？」

「うわ、気が利く！ 本当気が利く最高！」

実は現在、ハロルドたちの成婚式に向けて城内は驚くほどピリピリしている。水分も取らず紙束に血走った目を通す面々を見て、前世の書き入れ時を思い出しては心の中でエールを送っている。

（皆ご飯抜いてる日あるし、無理しすぎないといけれど）

ちなみに外交使節団は、王弟殿下を筆頭にそうそうたる顔ぶれが揃っている。

イアンもアルフレートの「妻」として、まずは立ち振る舞いから叩き込まれているところだ。夫と一緒に働く妻は比較的少なく、しかしパートナーを必要とする外交自体はほどほどに多いため、わりと歓迎された。

ただ、まだ主力としては能力値が低いため、イアンは外交官の妻としての立ち振る舞いを学ぶ程度だ。各国の状況などは深刻なものでなければ既に王妃教育で頭に入っているので、難しい外交な

どで必要な知識となるとおいしい、学生を脱してからの予定だ。

「イアン！ 会いたかった！」

「落ち着け、まだ二時間しか経ってない」

一日が終わる頃、わざわざアルフレートが迎えに来る。必要ないと言っているが、どれほど忙しくとも絶対に来る。本日もウキウキしながら迎えに来たアルフレートを引きずりつつ、先輩方と長官に挨拶をして部屋を出た。

張り付くのは挨拶が終わるまで待て、と散々注意したのだが改善しないので諦めた。大蔵卿が笑いながら「気にするな」と言ってくれたことも大きい。

ちなみに先輩方はアルフレートに呆れていて、イアンに同情の視線を向けてくる。解せない。

雑談した時に鬱陶しくないので聞かれ、全く鬱陶しくないし相思相愛だと伝えたにも拘らず未だに同情されているのはなぜなのか。やはり解せない。

「お疲れさん。ちゃんと仕事した？」

「ああ。イアンもお疲れ様」

シヨーンは気配を消して付いてきている。アルフレートとよく行動するようになってから暫くは、同級生の目が常に傍にあると何となく気まずさを感じていた。だが今となつては慣れてきて、良い意味で空気と同じだ。

以前は外ではラッセル家のニールが中心となり護衛兼従者として対応し、王宮などではその時々

で手が空いている者が対応してくれていた。しかし、いよいよイアンにも王宮の護衛が付けられ、彼らもまた空気に徹している。

稀に本気で傍にいることを忘れていて、うっかりアルフレートとイチャイチャしてしまうこともあるが、シヨーンを含め顔色一つ変えないのだから流石としか言いようがない。

「あれ？ アル、こっちじゃなくない？」

「ああ。兄上に少しかだけ応接室に呼ばれている」

「え？ 俺も？」

コクリと頷くアルフレートを見て、イアンは顔を引き攣らせた。

「なにになにに怖い怖い」

「大丈夫だ、俺がいる」

頼りになりすぎるアルフレートを見上げて目を煌めかせる。アルフレートは普段子犬のように懐いてくるので、ベッドの上にいる時と仕事をしている時は正直かなり格好いい。誰にも理解されないが普段は可愛いので、ギャップ萌えだとイアンは思っている。

「アルフレートが参りました」

「入っていいよ」

控えめに扉を叩きアルフレートが声を掛けると、中からハロルドの声が返ってくる。アルフレ

トの後ろから同じく断りを入れて部屋に入れば、想像と違いなくドミニクとハロルドがやたら近距離で来客用のソファに座っていた。

「悪いね、疲れているところに」

「いえ、何か急用だとか」

「ああ。アルフレートと婚約者殿には私の仕事を一つ肩代わりしてほしくてね」

「嫌だ。己がことは己でやってください。では」

即座に断りイアンの腰を掴んで踵を返そうとするアルフレートに、珍しく慌てた様子でハロルドの声がかかる。

「待ちなさい！ 嫌な仕事を押し付けようというわけではない。状況的に私とドミニクが対応できないからお願いしてるんだ」

「……どうだか」

「全く誰に似たんだ私の弟は。そもそもアルフレートにはとても良い話だと思うよ」

「そうだろうか」

「そうだよ。だから話をきちんと聞きなさい」

普通に兄に怒られたアルフレートは、珍しく渋々ではあるが話を聞く気になったようで、促されたソファに座った。イアンの腰にはアルフレートの腕が巻き付いているので、当然自動的に一緒にソファに腰を沈めることになる。

素直に対面に座わりつつも未だムスツとしているアルフレートを見て、ドミニクは苦笑した。

「お二人とも喉も渴いたでしょう？」

ドミニクの声を聞くとほぼ同時に、目の前に紅茶とちよつとした菓子が置かれてギョツとする。

全く音がしなかったのだ。優秀な従者なのだろう。

少し離れたところには当然ディップとションがツンとした顔で立っているし、チャールズは何やら忙しそうに書類を捌いている。他にも補佐の人間や護衛が数名いて、執務室はとんでもなく慌ただしい。その割には音が少なくして少々不気味だが。

「さて、詳細を説明するよ」



ハロルドは一息に説明すると、ふう、と小さく息を吐き出した。

「というわけで、私とドミニクに代わって二人に向向いてもらうことになったんだ」

「初の外遊としてはやりがいがあるな」

「ね、良い話だっただろう？」

「イアンが一緒という点を評価する」

一通り話を聞いてアルフレートが偉そうに話を引き受けた。イアンも特に異議は無く、頭に浮かんだ国のことを考えてみる。

「確か、かなり遠方の国でしたよね。国同士で多少の交流があったのは存じてましたが」

「おや、婚約者殿は不満かな？」

「とんでもないです。私としては初めての外遊になるので、些<sup>ちや</sup>か緊張はしますが」

「やはり肝が据わっているね」

のほほんと笑うハロルドとドミニクに微笑み返しつつ、イアンはあまり聞きなじみのない国の情報を頭の中で集めていく。

遠方に位置するエルゾディア国は神信仰の本神殿が有名で、絹の輸出で栄える豊かな国だ。その王太子殿下の御成婚式にこの国の代表として赴くこと、それが今回ハロルドに呼ばれた理由だった。

「エルゾディア国自体はそこまで宗教色が強い国じゃないから、変わった風習などもないし比較的文化も近い。まあ、周辺はそこそこ大きな規模の宗教国家が固まっているけど、今回は気にしないで問題ないよ」

「確か神信仰の強い国の中でも有名な方だと記憶していますが……」

「ああ、有名な理由は単に国内にある世界一大きな神殿が最古のものだからだろうね。観光地として有名なんだ」

「——逆になぜ宗教色が弱いのか、不思議ですね」

ハロルドとやり取りしながら、エルゾディア国の情報を一つ頭の中に付け加えた。遠い国なので、

イアンの中の情報はまだまだ少ない。

（今回は祝い事だし宗教色も弱めで文化も似てるなら、ちょっと安心だな）  
密に関わりがある国ではないものの、王族同士で何度か顔を合わせたことがあり、今回招待されたようだ。

ちなみにハロルドとは割と気が合うらしいが、アルフレートは二回しか会っていないのにあまり気が合わない、と面倒くさそうにしていた。ハロルド曰く、その国の王太子殿下とアルフレートでハロルドの取り合いをしていたというのだから可愛いしかない。アルフレートは全力で否定していたが。

「通常時であれば私とドミニクが代表として出向いていたが、今は難しい。叔父上たちでも、と思ったけれど、アルフレートと婚約者殿の顔も売っておきたいと思ってね」

「妥当だな」

ハロルドの言葉にアルフレートが一つ頷いた。

王族の結婚式は他国要人をも招待する大切な外交の場となるため、約一年をかけて綿密な計画を立て、国の威厳を落とさないよう慎重に準備が進められる。渦中の二人は本当に毎日、公務に勉強に結婚式の準備にと忙しいのが現状だ。

そんな二人は、近隣であればまだしも、遠方の国への外遊となるとかなり難しい。一か月以上も国を離れられないため、いずれ外交を担当することになるアルフレートとイアンに白羽の矢が立つ

たというわけだ。

「特に非友好な国でもないし今回は祝い事だ。ちょうどいいと思うよ」

「移動含めて一か月以上の期間を要するので、大変だとは思いますが……」

ドミニクがふにやりと眉を下げて心配そうにイアンの様子を窺っている。それに胸を張り笑って答えた。

「全然大丈夫！ 長期旅行になるし楽しそう！」

「婚約者殿、これは遊びではないからそれだけは注意してくれ」

「ぐっ！ き、気を付けます……」

珍しくハロルドがツッコミを入れてくるので、慌てて返事を返す。

普段はドミニクのストーカーでしかないのに、仕事のことになると手厳しい。背筋を伸ばして返事をするイアンの隣で、アルフレートがハロルドを睨んだ。

「兄上、口煩い」

「全く二人は相変わらず呑気な」

「兄上には言われたくないな」

「ドミニク……弟が冷たいよ、慰めて」

「ハロルド様っ」

横からヒシツとドミニクが抱き着いて、ハロルドの頭をよしと撫でる。嘘泣きをしたハロル

ドが満足そうにドミニクを引き寄せると、シッシツと手で払う仕草をしながら呟いた。

「あ、一か月後に出発だから」

「分かりました」

「明後日には出発しろ、などと無茶を言うかと思ったが」

「私の弟は一体、私を何だと思ってるんだ……」

悲しそうな顔をするハロルドをそのままに、アルフレートはイアンの腰を抱き執務室から出た。後ろから音もなく付いてくるションや他の護衛を含め、アルフレートに与えられている二回りほど小さな執務室へ滑り込む。

「随分長い旅になるから、準備は怠らないようにしよう」

「だな。アルはあちらの王子と会ったことあるんだよね？ どんな人？」

「普通といえば普通だな。俺は馬が合わないが」

苦虫を噛み潰したような顔をするアルフレートを見て、ソファに座りながらイアンは小さく首を傾げる。

「そんなに嫌なのか？ 二回しか会っていないんだろ？」

「嫌というほどではないが……そのたった二回の間、揶揄われた記憶しかないんだ」  
眉間に皺を寄せたアルフレートは拗ねたように口にする。



一度目は、アルフレートが初めて他国へ訪問した時だった。何度か既に他国訪問の経験があった兄のハロルドと違い、初めてのことにとても緊張していたらしい。

周りに誰も知り合いがない中で失敗はできない、と兄の後ろを付いて回るアルフレートを、その王太子殿下は非常に押搦って、何度もハロルドを別の場所へ引っ張っていかうとした。置いていかれては堪らないと兄の後ろを付いていくが、その度に雛のようなだなど笑われたのだ。

もちろん他意はなく、なんなら彼なりにアルフレートが可愛くて押搦ったのだろう。今ではそれも分かるが、当時はその男が非常に不愉快で、確かにハロルドを取り合うような構図になっていたらしい。

「兄上はあだからな……私は罪な男だと嬉しそうに笑うばかりで、全く助けてくれなかった」

「あーなんとなく想像つく」

「だから二回目に出った時は最早、嫌味の応酬しかしていない」

小さなアルフレートとハロルド、そしてまだ見ぬ他国の王太子を思い浮かべて思わず笑ってしまう。

「仲いいじゃん」

「まあ、お互い気を遣わなくていいから楽ではあったな」

（なんだかんた言っても楽しかったんだな……俺は初外遊になるからちよつと緊張するけど）

イアンの言葉を聞くと、アルフレートがピツタリと横にくっ付き小さく息を吐き出した。

「アレも、兄は懐深いが一度激怒すると取り返しがつかないことを知っている。だからか、兄には

多少気を遣っていた。俺と話す方が楽だったんだろう」

「それも分かる。いつも穏やかな人ほど怒ると怖いよね」

「兄が本気で怒ったのを見たのは一度きり。婚約者が他の人間と交流を深めようとしたと報告書が上がった一瞬だけだ」

え、と声を出してイアンは少しだけ血の気が引いた。

今のところ丸く収まったから何もなかったものの、もしあの時、あのまま元悪役令息たちが他の人間とデートでもしようものならばどうなっていただろうか。

「イアン、今更怖くなったか？ 安心しろ、兄は相手を殺したりはしない」

「そ、そうだよな。いや、まあ今はもう何もなかったんだから心配してないけどさ」

「社会的にも精神的にも死ぬことになっていたらどうが、婚約者が手の内にある間は大丈夫だ」

何も大丈夫じゃない、と思いつつも引き攣った笑顔で頷いておく。戴蛇はごめんだ。

「なんにしても、あれから随分経つし互いに大人だ。しょうもない言い合いはしない。外遊さえうまくやれば後はイアンとの旅行だ」

「だな。緊張するけど今回は特にただのお祝いだし、政治的なやり取りはそう多くはない、よな？」

「表向きは。我が国とエルゾディア国はそこまで関係が深くない。ただこれを皮切りにもう少し我が国の名産も売り出したいところではある。交流は深めねば」

なるほど、と頷きこの国の名産品を頭に浮かべた。

金の実と呼ばれる桃のような果物、精巧な銀細工、神の一滴と呼ばれるライトグリーンの鉱物、そして「我が国になれば、他のどこにもない」と言われている閨用の道具だ。

最後の名産品については「名産……？」と顔が引き攣るところだが、ベースがああ鬼畜十八禁ゲームの舞台国である。

この国にはそれはもう様々な、前世の世界で考えられたのであろう所謂大人の玩具の種類が豊富なのだ。その輸出力はかなり、すぐく、とんでもなく多い。聞いたことのないような国の連中ですら、この国の閨道具のことなら知っている、と言われている。

「まあ、変態チックなものはお勧めできないけど、金の実めちゃんこ美味しいし、銀細工は引くほど繊細で細かい柄が魅力的だし。鉱物もなかなかレアで、神の一滴は採れる国自体とても少なくて、品質はうちの国が一番と言っているいいもんな。頑張って売り込まないと」

「ああ、遠方だとしても輸送に問題が出る。そこが課題ではあるが……」

そう言うって考え込んだアルフレートは、ショーンから渡された書類を眺めて唸っている。ハロルドの執務室を出た時に、ショーンがシレッと今回の公務についての書類を預かっていたらしい。頭の中のことが纏まればイアンにも話をしてくれるだろう。

イアンはまだ婚約者の身であるため、知っていいことと知らなくていいことがあるのだ。

「……とまあ、この部分だけ頭に入れておいた方がいいな」

暫くすると、アルフレートがイアン用にまとめた紙束を渡してくれた。

「分かった。あとは招待客の顔と名前を一致させとかなないと」

「イアンはほとんど覚えてるだろ？」

「まあな。でもほら、最終確認ってやつ」

それを受け取りトントンと机で叩いてまとめながら答えると、アルフレートが嬉しそうに目を細めた。

「イアンがいるから全く不安はないな」

「俺もアルがいるから不安はないよ。一か月間しっかり準備しような」

そうして、一か月間みっちり皆に支えられながら準備を整えることになった。

その間に卒業も迎えることになり、何も考えずに穏やかに過ごしていた日々は終わり、新生活が幕を開けた。

## 第二章 慌ただしくも手は抜かず

ほどなくして無事に卒業できたイアンたちは、引き続き忙しい毎日を送っている。

「アル、時間大丈夫そう？」

「ああ、間に合わせる」

書類の束と睨めっこをしているアルフレートを見ながら、イアンは凝り固まった肩を回して小さく息を吐いた。

ハロルドに外遊を言い渡されてからというもの、いつにも増して日々は忙しく、あつという間に過ぎ去っていく。イアンとアルフレートは外遊の準備に追われ、一か月の間はほとんど休む暇もなく緻密なスケジュールが組まれていた。

アルフレートとイアンは現在、他国にてどういった立ち回りどのような情報を集めて、どんな友好を築けば良いのか、徹底的に頭に叩き込んでいた。その上で宗教観や文化、禁忌などの細かなところから、贈呈品の準備と公務用衣装も選定しなければならない。

外交文書も複数あり、不備の確認も必要だ。従者や王宮使用人がほとんど準備してくれる日用品

だって、ある程度目を通して最終確認するのはイアンたちの仕事である。

「ぐうう……使用人の方が趣味良さそうなのに」

任せつきりにはできない。全て任せてしまった上でミスが起こった場合、使用人たちの中から犯人捜しをして罰則を与えるのは非効率的であるし、そんな環境では使用人たちは怖くて準備を手伝えない。

そもそもイアンたちが初の外交である、ということは己たちに一番近い使用人や護衛たちだって、初めてである人物が多い。もちろんベテランも組み込んで対応に当たっているが、ともかく時間が足りない。

「一段落した。次は……ああ、正装か」

「そ。面倒だろうけど大事だからな、行くぞ」

アルフレートが嫌そうに目を細めるが、腕を引っ張って慌ただしく別室へ移動する。

二人とも外遊に向けての正装が必要で、今回はいくつかアイデアを出しており、王家お抱えのデザイナーが改めてそれを形にしてくれている。もう既に仮縫いや中縫いは終わっており、そこから更に最終確認をしてやっと本縫いへと移行する。時間が限られているため、現在お針子たちは寝る間も惜しんで作業に当たってくれているはずだ。

「ごめんね、お待たせ！」

「お待ちしてりました」

しっかりと頭を下げるガチガチムチムチの巨体で厳つい顔をした男はロッシだ。この国でも指折りのデザイナーである。そして、その隣に控えて小さく首だけコクリとしている小柄な男はヒースといい、この国きつての職人だ。

この二人、意外とロッシの方が小心者でヒースの方が肝が据わっている。今も緊張して顔つきが悪鬼の如く歪んでいるロッシに比べ、ヒースは既に飽きたようで、いつも手に持って歩いている布に何やら刺繍を始めている。

「相変わらず立ったまま……器用だなあ」

「申し訳ございません。ヒースはこの通り刺繍にしか興味がなく……っ」

「あ、いいいいいよ、気にしないで。じゃ、ロッシ、出来上がったものを見せてくれる？」

険しい顔をしたロッシの顔が青ざめたため、慌てて気にするなど示す。彼は小心者なので、いつ何時お偉い方に首を切られるかと戦々恐々としているのだ。有能なデザイナーである彼を手放すような阿呆なことは誰もする気がないので、自己肯定感が低いらしい。

イアンの軽い口調にホッとしたらしいロッシが、小さく咳払いをして、部屋の中央にある白布が被さっている人型の塊に近づいていく。王族にはそれぞれの体型に合わせた木製のトルソー型マネキンがあり、既にイアンのものも用意してもらっていた。

「こちらでございます」

バサリと音を立てて白い布が取り払われる。そこにあった二体のマネキンには、今回の公務用の正装が飾られていた。

「わあ……！ すっごくいいじゃん！」

「ああ、イアンの美しさを更に引き立てる素晴らしい衣装だ」

イアンとアルフレートは真っ先に互いの最愛の衣装を見て感嘆の息を漏らす。二人はその衣装を着た最愛を想像してうっとり目尻を下げた。

実はこの仮縫いや中縫い段階で、アルフレートは逐一「イアンの美しさを引き立たせるにはここはこの色だ」とかなんとか文句を付けて、かなり鬱陶しい客になっていた。時間もないのだから、と毎回イアンが口付けて大人しくさせていたのはとてもない思い出である。

暫く見惚れた後、慌てて互いに試着した。

各自離れたところで着替えるのだが、当然手伝いが必要である。本番に向けての慣れも必要、ということで王家の許可を得てニールもこの場において手伝ってくれている。

ニールは相変わらずアルフレートに呆れた視線を向けているが、流石に職場では声を荒らげることも無く、他の使用人と一緒に空気になっていた。

「聞いてないぞ！ 貴様、不埒な想像でもしたら」

「アル、煩い！ ってか仕事してんだから文句言わない。分かった？」

「——分かった」

イアンの着替えはいつもはニールとロッシが対応していた。しかし今回は練習を兼ねているので、外遊に同行する王宮の使用人がロッシの代わりに対応している。それを見たアルフレートは一瞬憤るも、イアンが叱ればこんな風にすぐ大人しくなる。

正直、慌てふためいて子犬のようにキャンキャン吠えているのは微笑ましい。部屋の端っから対極にいるイアンのことを心配そうにチラチラ盗み見るアルフレートを見て、笑いながらニールにそう言うのと、見たこともないくらい顔が引き攣っていたが。

暫くして互いに着替えが終わると、正装した姿を見て息を詰めた。物言わず二人してゆつくりと近づき、ホウっと息を小さく吐き出す。抱きしめ合えないのが残念だ。

「イアン、とても美しい」

「アルもすぐカッコイイよ。惚れ直しちゃう」

「もっと惚れ直してくれ」

（相変わらず可愛いヤツ）

フフフ、と笑えばアルフレートの目が愛おし気に細められる。この冷たそうな顔を、少しだけ崩れる瞬間が好きだ。他の者には分かりにくいというところも高得点である。

アルフレートの正装は、白基調の軍式ロングコートだ。とても清潔感があり神聖な雰囲気醸し

出しているのが見て取れて、アルフレートの無表情とも言える麗しい出で立ちに似合っていた。金糸の縁取りの刺繍が施され、肩には金糸の飾り房があり、肩から斜めに掛ける王家の青を基調としたサッシュ、胸元には王家の紋章が一つ飾られていた。コートからチラリと覗くピタツとした黒のパンツと黒の乗馬風ブーツも、動きやすさが計算されている。

対してイアンの正装は、割と機能性を重視して作ってもらった。黒寄りの紺を基調とした、詰襟の軍服だ。シルバーで紋章を刺繍してもらい、華美にするよりも上品さを選んだ。ベルト付きのジャケットで腰をやや絞り、肩章も控えめでブーツは黒だ。念のためハーフマントも準備してもらった。

「うん、いいね。ロッシ、ヒース、ありがとう」

「きよ、恐悦至極に存じます」

「存じます」

震える声で感動しているらしいロッシに比べ、適当な返事をするヒースにクスリと笑った。半分も話を聞いておらず、名前を呼ばれたので反射的にロッシの言葉を真似ただけだな、と思いつつも素晴らしい出来栄えを前にしては文句も出ない。

「着心地は如何でしょうか」

「とてもいいよ。動きやすいし」

「気になるところはないな」

ロツシの言葉に、イアンは動きながら、アルフレートは己の服を見ながら答える。

着心地から重さや皺の寄り方なども全て確認し、問題がないことが分かると早々に着替えた。これから本縫いに入るのだから、と気を遣わせないように急いで広い試着室から出ていく。

「急がせてごめんね。出来上がりを楽しみにしてるよ」

「期待している」

去り際にイアンが声をかけると、同じくアルフレートも声をかけた。

アルフレートは王族のためそう簡単に謝罪や礼や賛辞を口にしないのだが、最近はいアンに感化されて使用人などにも声を掛けるようになっていた。気軽に接することができると示すのは、王族の立場としては隙を作るのであまり良くないのだから、アルフレートは他の王族に比べても壁が厚すぎるのでちょうどいいと思う。

「身に余る光栄に存じます。ご期待に添えるよう、必ずや、最高の仕上がりをお約束いたします」

「します」

最早、感動しすぎて泣きそうになっているのか視線で殺そうとしているのか分からないロツシの言葉と、相変わらず話を聞いておらずハツとして適当に返事をするヒースを残し、また慌ただしく別室へ移動する。

今度は外遊先の気候に合わせて持っていく服のチェックだ。動きやすい服と軽装の公務服など、本日は衣類に関しての最終チェックが目白押しである。

「あっちも暖かいんだよね？」

「ああ。薄着では寒いだろうが、厚着も必要ない程度だ」

二人の時間は多いが、忙しくてなかなか甘い時間は少ない。それでも着々に準備を進めていると、より一層互いのことを理解し、絆が深まっていく気がする。それがイアンには心地いい。



「……つかれたー」

「そうだな」

心行くまで仕事をして、本日はわりと早めに一段落が付いた。出立まで残り半月も無いが順調である。時間がないことと慣れないことで疲れているものの、気持ちのいい疲れだ。

「はあ……この部屋落ち着くわ」

「そうか。嬉しい」

ゆつたりとアルフレートの部屋にお邪魔するのは久しぶりだった。

実は最近ずっと、イアンは王宮に寝泊まりをしている。ただそれは、仕事の延長上泊まり込みをしているようなものだった。

王族と高位貴族は何でも手に入れて優雅に暮らしてそんなものだが、意外にも泥臭く働いて、目の下にクマができている人間はわりといる。催し物が比較的少ない時期はホワイトなのだが、何かあるとブラック企業も真つ青の労働環境だ。その分、給金が良いので誰も文句は言わないが。

「明日はお土産項目の最終チェックしなくちゃ」

「ああ——イアン、嫌になってないか？」

自室のソファでぐったりと体を崩しているイアンの視界には、不安そうな目をしたアルフレートの顔があった。あまり顔色は良く無く、互いに無理をしているのだと知れる。

「嫌にはなつてないな、どっちかというとな楽しい」

「楽しい？ 本当に？」

「アルと二人きりなのに嘔吐く必要ないでしょ。楽しいよ、二人で二人の居場所を作ってる感じで」

「二人の居場所……」

いそいそと近づいてきたアルフレートのために体を起こし、ピツタリと体を寄せてソファに座るアルフレートの肩に寄りかかる。腰を抱き寄せて頭を撫でるアルフレートを見つめながら、頬に口付けた。

「そ。だってさ、これからずっと二人でいるには、確固たる立場の確率が必要だろ？ 確かに俺たちが今更何かに引き裂かれるなんて考えられないけど、いつ何時何があるか分からないから、こうやって地盤を固めて皆に望まれる立場に立つて揺るがないようにしないと」

「揺るがないように——」

「アルは楽しくない？」

疲れた顔は二人とも同じだ。でも、アルフレートだって日々睡眠時間を削りつつも精力的に駆け回っている。きつと、イアンと同じ気持ちでワクワクしているはずだ。

「とても楽しい」

「だろ？ 一緒だと思った。いつになくハロルド様の話もちゃんと聞いてるしね」

「兄上は余計なことを言うから嫌だ。俺の格好悪い話ばかりだ」

「アルはいつもカッコイイし可愛いぞ」

ハロルドやドミニクたちともかなり詰めた話をしている。互いに忙しかっためなかなか時間が取れず、打ち合わせをする時は一分一秒も無駄にできない。だというのに、少し休憩を挟むとすぐにハロルドは昔のアルフレートの可愛いエピソードをつらつら自慢げに語るのだ。

例えば他国の王族の子どもと顔を合わせた時に顔が怒ってるみたいで怖いと泣かれ、釣られてアルフレートも泣き、ハロルドの後ろに隠れたこと。護身術として初めて剣術を習う時、先に剣術を習い始めていた兄が打ち合っている姿に憧れ、兄と同じ剣を持ちたがったが振り回せずに転んだこと。

「あんな情けない話を聞いてもか？」

「情けなくないだろ。微笑ましいというんだ、ああいうのは」

そんな可愛い話を披露する度にアルフレートが怒るのだが、如何せんハロルドは全く気にしていない。朗らかに笑って弟自慢を止めないので、アルフレートからすれば堪ったものじゃないのだろう。

思い出してクスクス笑うイアンに、アルフレートは口を尖らせて不服ですと訴えてくる。笑いながらアルフレートの膝に向かい合わせに乗って、鼻と鼻を擦り付け額同士をくっつけた。

「な、暫くイチャイチャできないだろ？」

「ああ」

「旅の最中も難しいかも」

「そうだな」

囁くようなイアンの言葉に、アルフレートの喉がゴクリと鳴った。視線を逸らさないまま、たつぷりとアルフレートを眺め、視線を唇から首筋へゆっくり流していく。アルフレートの腕が動くのを見た瞬間、イアンは口を開いた。

「風呂行くわ」

「イアンッ」

唇をくっ付けてそう言うと、スルリとアルフレートの膝から降りた。慌てて腕を掴もうとするアルフレートを見て意味深に笑い、イアンは小さく呟く。

「準備してくる」

瞬間的にその目に宿る熱にゾクリと体が震えた。

(アルのあの目、マジで好きだわ)

大体イアンが煽ると翌日悲惨な目に遭うのだが、アルフレートの燃え滾るような劣情が浮かぶその瞳が好きで、ついつい煽ってしまう。その日の夜は大抵グズグズに溶かされるのだが、むしろそれが酷く心地よい。



鼻歌を歌いながら来客用の浴室で準備をする。流石に準備中はニールも外で待機してもらい、準備ができてから体を揉みこんでもらった。

イアンは体を自ら洗うのだが、髪はニールに任せている。理由は気持ちがいいからだ。疲れが残らないように湯船に浸かり、長湯はせずにアルフレートの自室に戻る。

扉の前でニールには解散してもらい、護衛たちに見守られながらアルフレートの部屋の中に入った。

「アル？」

呼んでみるがソファにはいなかった。なぜか既に薄暗くなっている室内で奥の方へ目を凝らすと、



ベッドに腰を掛けたアルフレートがジッとイアンを見つめているのが分かる。その視線が己の体を舐め回すように這っているのが分かって、抑えられない笑みが口元に浮かんだ。

アルフレートもどうやら急いで湯を浴びたらしい。バスロープで前を隠すこともしていないため、既に興奮している様子が見て取れた。

広い部屋の中をゆつくりと歩いて近づき、見ようによつては睨むようにしているアルフレートの前で、寝着を一つずつ落としていく。

「アル、眠い？」

パサリパサリと寝着が床に落ちた音がする。ワザと的外れな言葉を掛けながら、裸になってアルフレートに手を伸ばせば、グッと腕を引かれてあつという間にベッドの上に組み敷かれた。

「イアン、そんなに煽って、どうなっても知らんぞ」

「いいよ。久々だし、好きにされたい気ぶ——っん」

噛みつかれるような口づけを受け、体の力を抜いた。角度を変え、何度も口付け、息ができないくらいに苦しくて満たされる。

アルフレートの片手がイアンの喉元に触れ、そのままジリジリと下に下がっていく。それと同時に、アルフレートの唇も下がり、喉仏に甘噛みされてビクリと体が震えた。

「は、んっ——な、んか、すごい興奮してる、かも」

「俺もだ」

互いに興奮しているのが分かる。上ずったような声で、ヒソヒソと言葉を交わし、後はもう語らなかった。

アルフレートの舌が乳輪を確かめるようになぞり、ピンと立った乳首をじつくりと吸い上げて甘噛む。手が鳩尾から腹、内腿と撫でて前から会陰をマッサージするように触れられ、モゾモゾと腰を動かした。

ハアハア、と荒い呼吸を繰り返す。少し強めに撫でられた時、ビクンと体が大きく動き、声にならない声が漏れる。

「——っは」

同時にジュツと乳首を吸われて、ジワジワと体の奥から何とも言えない快感が迫り上がってきた。乳首を弄られ、会陰をトントンと小刻みに叩かれると、どうしようもなく腰が揺れる。

「あ……っんん」

「イアン、可愛い」

アルフレートの掠れた声に、求められているのが分かりゾクゾクと背筋が震えた。

いつの間にか両足は開かれ、アルフレートはバスロープを脱ぎ捨てていた。いつまで経っても少し恥ずかしい恰好だが、この羞恥心も己とアルフレートを煽るスパイスだ。イアンは口元に愉悅を浮かべつつ、恥を捨てて自ら足を抱えて小さく呟いた。

「早く、アル」

## 立ち読みサンプルはここまで

「——っ」

アルフレートの顔が凶悪に歪んだ。いつ見ても最高に滾る表情だ。同じく、大きく左右に開いた足を抱えて全てを見せつけるようにして艶然と口角を上げるイアンの痴態は、何度見てもアルフレートの欲をかき立てる。それを分かった上で己を煽るイアンに、アルフレートの体温がまた上がる。

アルフレートは口元に笑みを浮かべながらイアンの会陰に唇を寄せ、ジュルジュルと音を立てて吸うと、ビクビク震える体を押さえて尻穴に舌を這わせた。いくら綺麗にしたとはいえ、本来出すべき場所に舌が入り込み、抜き差しされて舐め回される感覚は背徳的だ。

背を反らし、もつとと言うように腰を揺らすと、アルフレートの頭を両手で掴む。

「あ、あぁっ——ん！」

暫く舐め回された後、アルフレートがふと顔を上げた。用意していたらしい潤滑油を手塗り込むと、間を置かずズブズブと指が二本入ってくる。すっかり簡単に指が入るようになったそこは、チュプチュプと音を立ててアルフレートの指を食んだ。

「んう、は……っ」

弱弱しく首を左右に振り薄っすら涙を浮かべて喘ぐイアンの姿を、アルフレートは鋭い視線で観察している。その口元に浮かぶ歪んだ笑みにゾクリと怖気が走り、それと同時に体が小さく痙攣した。

「あぁっあ、はう」

（やばい、ずっとイッたみたいに、なってる）

指を抜いたアルフレートは、精液も出さず体を震わせているイアンの口元に噛みつき、グツと陰茎をイアンの中に押し込んだ。

「んんう！」

息もできず目を見開きボロリと涙を零すイアンを見て、アルフレートは目を細めた。サラリと頭を撫で、角度を変えて何度も口付ける。

「イアン、動くぞ」

「……うん、うごいて」

瞬間、パンツと強く打ち付けられ背が大きく反った。そのままパンパンと激しい音が耳に響いて、イアンは強い快感の渦に吞まれていく。強く打ち付けたと思うとグルリと穴を広げるように腰を動かされ、精液が出そうになり、咄嗟に己の陰茎を握った。

「は、イアン、そういうことすると、もつと止まらない」

「あ、あぁ——」

アルフレートの言葉が右から左に流れていく。

強い快楽をもつと感じていたくて、イアンは陰茎を握り続けた。耳元でアルフレートの熱い吐息が繰り返される度、イアンの感度は高まり、アルフレートの絶頂の瞬間、己の手を離れた。